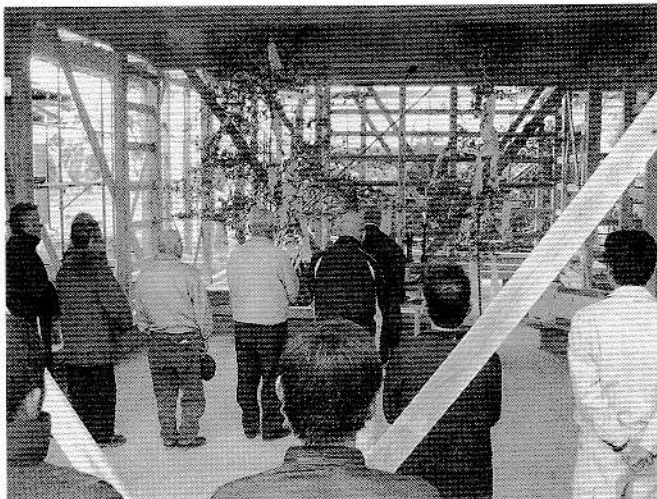


## 曹洞宗西光寺様で上棟式

静岡県湖西市白須賀



西光寺様の上棟式の様子（平成24年1月）

去る一月二十四日（火）、湖西市白須賀の長谷山西光寺様（尾島宏徳住職）において、書院と庫裡の上棟式が執り行われました。

式典当日は建設委員を始め、関係者が早くから準備のために集まっ

ていました。境内に枯れた大木が立っているのですが、昨年の台風のとくにも強風にあおられて大きな枝が落ちたり倒れたりする危険を心配されていた

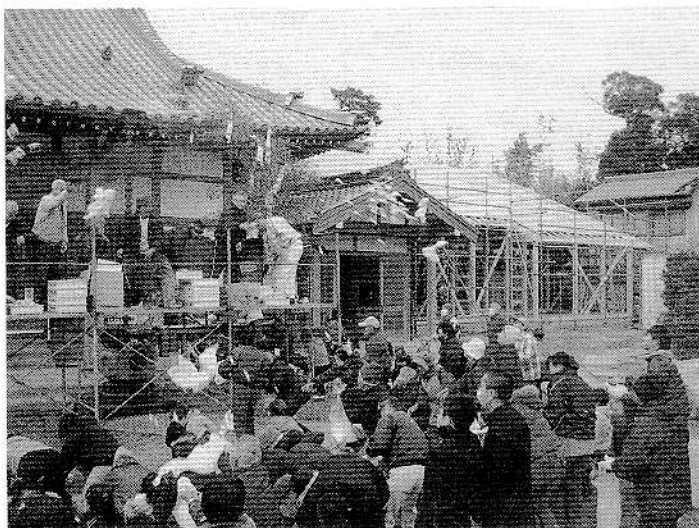
ため、建て方の工事のために重機が境内に入っている間に、重機で釣って置いて切ってしまうということになり、急遽建設委員の方々が率先して切ることにになりました。木が大きすぎて根元から切り倒すことは出来ませんでした

が、大風でもまず倒れないくらいの高さになり、たとえ万が一倒れても建物には当たらない様になりました。

厳かに読経が響き渡る中を参列者が一人一人焼香して、皆で今後の工事の無事を祈りました。

式典後の餅撒きは、新築中の庫裡と書院からでは、安全を考慮すると大勢

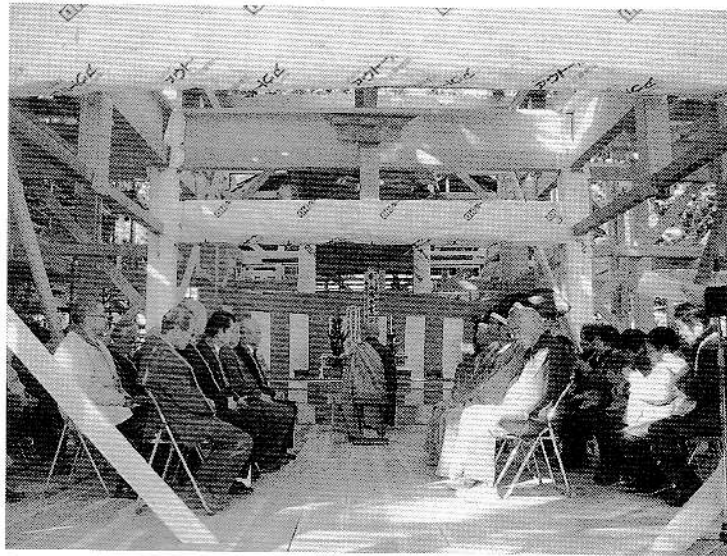
の人が周りに集まりきれないため、本堂前に特設ステージを設置することになりました。ここでも建設委員の方々が率先して手伝って、短時間で準備が終わりました。皆で協力し合って、新しい書院と庫裡の完成を楽しみにしているのが表れているように前向きに取り組んでいました。



西光寺様の餅撒きの様子（平成24年1月）

妙心寺派  
臨濟宗 妙相寺様で上棟式

静岡県浜松市西区志都呂町



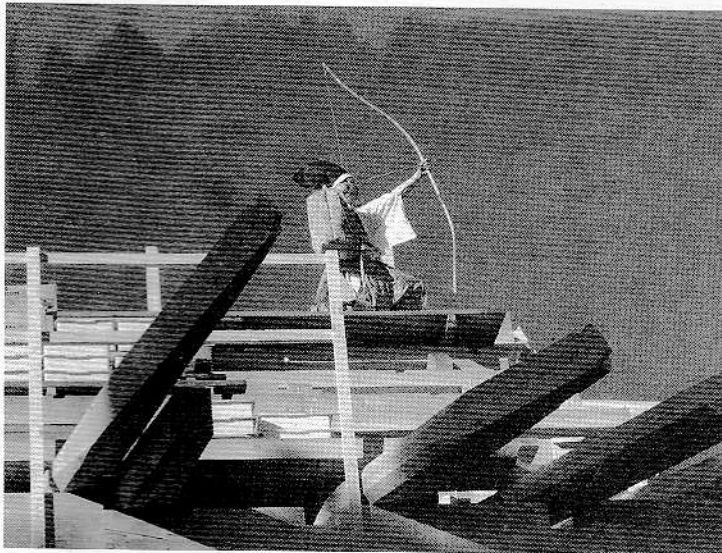
妙相寺様の上棟式の様子（平成24年2月）

去る二月十一日（土）、浜松市西区志都呂町の潮鏡山妙相寺様（正山豊昭住職）において、本堂の上棟式が執り行われました。

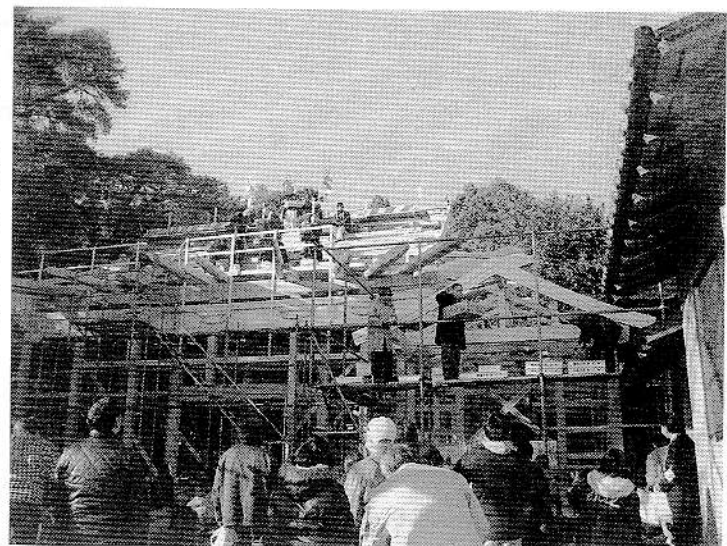
式典当日は天候に恵まれ、早い時間から大勢の檀家さんが境内に集まって来てい

ました。檀家さんばかりではなく、餅撒きを楽しみにしている近隣の子供たちもたくさん来ています。

式典は大勢の人の見守る中、厳かに進められました。住職たちの読経のを、参列者一人一人が焼香して、今後の工事の無事を祈願しました。焼香の後は、装束に身を包んだ棟梁たちによって、引き綱式や鳴弦式



妙相寺様の鳴弦式の様子（平成24年2月）



妙相寺様の餅撒きの様子（平成24年2月）

などの古式ゆかしい棟上の儀が執り行われました。境内を埋め尽くした大勢の人も、珍しい儀式を静かに見守りました。

最後に待ちに待った餅撒きが行われました。大勢の人が押し合って怪我人が出ない様に、会場には子供や老人向けの餅撒きステージが用意され、本堂からとの二箇所からたくさんのお餅が撒かれました。

## 東日本大震災から一年

天峰建設代表取締役社長 澤元教哲

未曾有の被害をもたらした昨年三月十一日（金）の東日本大震災から一年を迎えます。死者一万五千人を超え、行方不明者もいまだに三千人以上、被害額は十六兆を超えと言われていています。人的被害でも経済的な被害でも阪神淡路大震災の規模を大きく上回ります。また、メルトダウンした原発の影響で今後も農業が出来なかったり、出来ても風評被害を受けたり、人が住めなかったり、まだ震災による被害が終わったと言うわけでもなさそうです。肉親を失ったり、故郷を追われた方の心中はどんなであろうか、そういう精神的な被害まで含めると、本当に未曾有の震災でした。

阪神淡路大震災の後、まだ倒壊した家屋があちこちに残っているうちに、今後の耐震性向上に活かすべく、現地に調査に赴きました。年代の古い建物ほど倒壊しているものと思っていたのですが、実際は筋交いを義務付けた建築基準法改正後の比較的

新しい建物が、瞬間的に大きな力が加わったことよって筋交いが柱を折ってしまっている形で壊れているのが目に付きました。建築金物などを使って補強してある場合でも、金物を固定しているボルトの頭が瞬間的な大きな力で飛んでしまっていました。改正以前と比べれば改正以後の建物は格段に剛性が高まっているはずですが、それでも瞬間的な大きな力には耐えられなかったのです。これは、阪神淡路大震災が活断層による大都市の直下型地震による揺れの被害だったからです。興味深いことに、それを裏付けるように、面的に広範囲にとりよりも、（恐らく活断層に沿って）線的に被害の大きい地域が集中していました。

阪神淡路大震災では建物の倒壊や家具の転倒によって圧死された方が大勢いました。中には倒壊した建物の下敷きになっただま逃げ出せずに火災に巻き込まれたり、発見が遅れてしまったために亡くなられた方までいたようです。建物が倒壊しなければ助かった命はもっと多かったです。

でしょう。

今回の東日本大震災では、プレート境界型の地震による揺れであったため、震源地から被災地までの距離があり、直下型の地震ほどの瞬間的に大きな力が加わる揺れではなく、揺れそのものによる人的被害や建物への被害は、阪神淡路大震災に比べると地震の規模の割には少なかったようです。ただし、ほとんど無傷だった建物や人を、後から襲ってきた津波が押し流してしまいました。また、震源からかなり遠い内陸部で、液状化によって建物が傾いてしまったタイプの被害も出ました。

近年では剛性を高めるばかりではなく、建物の揺れを抑えるために建物を揺らさせる免震工法も採り入れられています。驚くべきことに最新の免震工法の発想は法隆寺などの五重塔に既に見られたものです。建物が倒壊さえしなければ、津波が来るまでに逃げられる可能性は大いに高まります。津波に流されない建物は無理でも、これからも伝統技術を活かして地震で倒壊しない建物を建てていきたいです。



# 知る得る

## 備えあれば憂いなしの話

日本国内ばかりか世界中に衝撃を与えた東日本大震災から早一年を迎えます。テレビでも特集の番組が多く、あらためて映像で見ると再び恐怖がよみがえります。あらためて亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。ご遺族の方、今も故郷に帰れない方、復興に努力されている方、それらの方にどんな言葉を掛けたらいいのか、言葉も見つかりませんが、これからも見守っていきたいと思います。

今回は昨年の震災や台風の被害から、日頃からどう備えておくべきか、「備えあれば憂いなし」の話です。

阪神淡路大震災では死者のおよそ九割が建物の倒壊や家具の転倒などによる圧死と損傷死だったのに対して、東日本大震災では死者のおよそ九割以上が津波による水死でした。圧死と損傷死も四%ほどあったのですが、流された瓦礫に巻き

込まれた結果だと見られています。

これら二つの震災の例を見ると多くの犠牲者が出ていても原因は大きく違うということがわかります。これらの原因から命を守るためには、地震で倒壊しない家で暮らす、津波の心配の無い地域で暮らす、ということが考えられますが、どちらも実現するのはなかなか難しいことです。

現実的な備えとしては、これから土地を求めるとすれば、その地域の歴史まで調べて、過去に津波が襲っている地域や沼などを埋め立てた軟弱地盤であれば避ける、避けられないのであれば必要に応じて地盤改良をすることが必要です。

軟弱地盤の上に既に建物が建てられてしまっている場合には、信用のおける工務店に耐震改修をしてもらうことで、液状化で家が傾いたとしても倒壊を免れる可能性が高まります。地盤がしっかりして

も、耐震性が低い家は耐震工事を行うべきでしょう。静岡県ではTOU KAI-O（東海・倒壊ゼロ）プロジェクトに取り組んでいて、住宅の無料耐震診断を受け付けていますので、ぜひ利用しましょう。天峰建設では本堂などの伝統的な工法の建物の耐震診断も請け負います。

建物の倒壊が何とか防げるようであれば、後は素早く避難出来る様日頃から避難場所と避難ルートを決めておくことが大切です。地域で決められている避難場所の、津波に対する安全性を自治体に確認しておくことも大事です。また、家族の所在が不明な場合に探していて逃げ遅れない様に、避難場所で待つなど、ルールを決めることも大切です。避難場所に着いてからも本格的な救援活動が開始されるまで、最低三日分の水と食料を準備して非常持ち出し袋で持ち出せるようにしておくことも忘れずに。